

裏表紙をめくれば

福井県立藤島高等学校

水上 佳理奈

高校の図書館を利用してすぐに味をしめたことがある。それは、本の裏表紙に貼ってある紙に、返却期限をハンコでおしていくということだ。自分が借りた本が、今までに何人の生徒に借りられていったのか、前に借りられたのがいつなのかを知ることができる。

中学校が創立八年と新しく、図書室が広がったせいかな、初めて高校の図書室に入った時には少しがっかりした。高校だから、もっとたくさん本であふれていると期待していたのだ。

この日初めて借りた本は、「飛鳥」という新書だった。その春、飛鳥に家族旅行に行ったこともあって手にした一冊だ。奥の暗くてひんやりした本棚にあった。

司書の先生がピッとバーコードに通し、本の裏表紙をめくって返却期限のハンコをおした時、びっくりした。紙は真っ白。何と、私が「飛鳥」を借りる最初の人だったのだ。浅からぬ歴史を持つこの学校の図書室の本の最初の読者が入学したての私！修飾語だらけの文になってしまったが、とにかくそれくらいびっくりした。どきどきしながらそつと表紙をめくると、「平成15・9・11」というハンコがおされていた。平成十五年九月一日に貸し出しが開始されたということなのだ。平成十五年といえば、私はたったの五才。文字もろくに読めなかった頃だ。それから一年、この本は誰にも触れられず、冷たい本棚でひっそりと息をひそめていた。そして今、私と一緒にいる。まるで私を待っていたようで、急にこの本がいじらしくなってきた。十一年間学校に暮らしていながら、この本はまだ、校舎のことを全く知らないに違いない。教室へ帰る道すがら、初めて見る教室の並びや中庭の草木に、本が幼な子のように感嘆の声をあげているのを感じた。ページをめくる時には、人の指とふれ合う本の喜びが伝わってきた。本の中身を楽しむというよりは、本と一緒にいること自体を楽しんでいた。

結局、「飛鳥」は途中まで読んで返してしまった。でも、私にとっては、大切な友達のような存在だ。入学したてで、何もかもが目新しく、それでいて少し不安だった微妙な気持ちを一緒に共有したのだ。私はあの時初めて、本には意志があると思った。

それ以来、私は本を借りる度に、まず最初に裏表紙をめくるようになった。三年前、七年前、十年前……。前の人が借りてからだいぶ年月がたっている本と出会うたびに、私は、久方ぶりに人とふれ合う本の喜びを想像した。本は、棚から少しも動くことができずに、ただひたすら長い年月をたえしのび、何百分の一の確率で、ようやく人と会うことができたのだ。当てもなく待ち続ける、本当にいじらしい。

カウンターで日付がおされる時には妙な満足感が広がる。この本の人生に（本だから「本生」といふべきだろうか？）、確実に、私がいたという証が残る。高校三年間なんてあつという間で、卒業したらきつと「よその場所」になってしまう。だが、この本はこれから何年も、セーラー服を着て学校生活を送っていた私を、小さな裏表紙に残してくれる。大切なものを隠していくような気持ちだ。

先日、図書室へ行って、ふと、奥の新書の棚に足をのばしてみる気になった。何十冊と本がっ

まった棚を見ていくと……あった。「飛鳥」はやはり、冷たく暗い本棚の上に鎮座していた。裏表紙をめくる。26.5.7。あの時の日付があった。今はもう高校生生活も後半に入り、入学したての私と今の私は全然違う。それでも、たった五つの数字の中に、昔の私がいた。

そのままカウンターに持っていく、本をバーコードに通した。司書の先生が裏表紙をめくり、ハンコを押す。15.12.24。高校二年生の、冬の私。